

【研究報告書】

青少年活動がもたらすもの

～リーダー体験者に聞く～

2015 年度 (公財)兵庫県青少年本部補助事業

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究委員会

2016 年 3 月

目 次

はじめに	1
地域を基盤とした団体活動の経験から	2 - 3
青年期のリーダー体験から その1	4 - 5
青年期のリーダー体験から その2	6 - 7
今回のヒアリングを通じて感じたこと	8 - 9
提 言	10 - 12
委員名簿	13
調査ヒアリング開催日程	14
資料【2012 年度調査研究ダイジェスト版】	15 - 17

はじめに

兵庫県青少年団体連絡協議会は公益財団法人兵庫県青少年本部よりの受託事業として、調査研究活動をこれまで行ってきた。

第1回は「子どもの頃の体験が大人になってどう活かされているか」について調査を行った。学校帰りの道草での発見や驚きが、大人になって好奇心を刺激されたり、先生に褒められたり叱られたりしたことが自尊感情の醸成につながったことや、家庭での規則正しい生活体験が大人になっても生かされていたり、家族との豊かなふれあいが思いやりの心を育てた。また、地域での仲間との自然遊びがリーダーシップや安全能力を身につけることに、また物を作る体験が創造力や道具の扱い方を習得することにつながるなど、子どもの頃の体験の大切さを実証できた報告となった。

第2回は「子どもを団体活動に参加させている親の意識調査」を実施した。その結果、親が子どもの頃と今日の環境の変化が顕著に現れた。また、青少年団体は、体験を重視する活動、異年齢の集団活動であるとのイメージがあり、非日常的な体験活動を仲間や新しい友達とさせたいという期待が明らかになった。そして、「青少年の置かれている社会、くらしの現状を正しく理解し、団体活動を推進しよう」、「活動が目指すもの求めるものを明らかにし、学校や親の理解を積極的に求め共有しよう」、「家族を巻き込んだ活動を試みよう」、「多様で個性的な青少年の状況に応じたリーダーシップを身につけよう」、「団体活動と地域活動の連携を!」、「バーチャルな時代にリアルな体験を」、「青少年団体活動で「チャレンジ精神」「自立」「協調性」を身につけよう」の7つの提言を行った。

第3回は「県内企業・事業所の青少年の健全育成に関する意識調査」を行った。社会貢献活動は環境面やトライやる・ウィークなど産業・労働分野が多く、教育・子育て分野は46%であった。また、採用に際しての資質は、物事に進んで取り組むや秩序やルール・人との約束を守る、色々な人と協調出来たり和やかに過ごせることが重視されているが、今の若者の多くはできていないと答えている。しかし、青少年活動等に参加した経験は評価すると答えている。その結果、青少年活動の大きな成果、「社会人生活をスタートさせる若者たちの基本資質が育つ」ことを広く社会にアピールしよう。青少年団体は社会のニーズを常に考慮しながら活動に取り組もう。青少年団体は活動を通じて、成長する青少年の姿をしっかりとらえよう。企業・事業所の理解と協力を得て、さらに青少年活動の輪を広げよう。青団連や青少年本部、または行政（教育委員会）、そして企業・事業所等の連携・強化を深め、社会貢献活動に取り組みやすい環境をつくろう。の5項目を提言した。

以上の研究調査を受け、本年度は、実際に少年期や青年期に青少年活動を経験した人々の話を聞き、生の声で、今までの調査研究の実証ができるかどうかの検証を行い、それらの報告や提言をまとめた。ぜひ、今後の活動に役だたせていただきたい。

最後になりましたが、今回のヒアリングにご協力をいただいた方々、また団体に心より感謝申し上げます。

2016年3月 兵庫県青少年団体連絡協議会

地域を基盤とした団体活動の経験から

出席者構成： 30代1名(男0女1)、40代6名(男2女4)、50代3名(男2女1)
60代8名(男6女2)、70代2名(男2女0)

*対象者全員が過去にはメンバーまたはリーダー経験者

①子どもの頃や青年期の体験について

- ・小学生のころ参加したキャンプファイヤーが楽しかったし、子どもどうして参加することができた。また、中学生の時に但馬で時計のないキャンプを体験し、自分たちで考えたプログラムやドラム缶風呂を沸かすなど、時間にとらわれない体験が、強烈なものと感じ、地元に戻って、仲間とリーダーグループを作りたい、役員さんや指導者に相談し、アドバイスを受けながらつくった。
- ・川でシャンプーを使って頭を洗っているとすごく怒られた。下にこの水を使っている人や水辺に生き物いるのではと言われ、気づかされた。
- ・子どもの頃思いっきり遊んでいたのでもろんなことが自分でできるようになった。
- ・青年の活動に関心はなかったが、村芝居を見て感動し、関わるようになった。
- ・高校生が地域のイベントにボランティアとしてかわり、よい体験をしている。それは、彼らが書く論文にあらわれている。
- ・地域の青年の活動は楽しいことばかりではなく、つらいこともあったが、そのメリハリが活動の魅力になった。
- ・地域の青年活動には「共動」と「共遊」がベースにあったので、のめりこむことができた。
- ・他グループとの連携を深めることにより、気づきややる気につながった。仕事との両立はむづかしかったけど、得るものがたくさんあった。
- ・地域の青年活動を地域も企業も応援してくれた。



②子どもの頃や青年期の活動を振り返って

- ・最初はどんな人が参加しているのかわからずドキドキしていたが、キャンプ場で出会い、共同作業が始まると、違和感なく話ができて、協力して様々なことにチャレンジしながら、仲間の素晴らしさとやり遂げる実感が印象に残っている。今も付き合っている人もいます。また、リーダー活動をして、子どもがお姉ちゃんと慕ってくれうれしかった。
- ・中学生の頃の体験が高校のクラブで積極的に活動したり、提案ができたりと生かされた。
- ・保護者会などで話すことに抵抗がなくなったのは、リーダー活動の経験が生きていると思う。
- ・言い出しっぺになり進んで取り組むようになった。
- ・どちらかといえばこもりがちな性格だったが、青年の活動を体験することにより積極的になった。
- ・青年期の活動が、コミュニケーションなどで役立っている。
- ・青年活動の経験が、事業や組織に関わるとき、役割分担が上手にできたり等役立っている。

③社会への関心、関わりについて

- ・子どもが小さいころは、子どもが参加する活動を手伝ったり、役員としてかかわった。
- ・地域で行事を計画するときに、活動の経験から全体の流れや準備することが見えており、話をまとめたり進めるのに役立っている実感がある。

- ・ 保守的な親が多く、役についても仕事や行事をはぶこうはぶこうとする人が増えてきたが、経験があるので、苦にならない。
- ・ 親は、子どもが良い体験をしても広めようとしない。他の人に知らせたくない。
- ・ 青年期の活動を思い出し、今の生活に役立たせたい。
- ・ 「なーなー」がなくなってきている。
- ・ 地域コミュニティと行政が連携することが必要。活動経験者がリーダーとなり、今の地域課題をうまく抱え込んだ取り組みが考えられないか。

④今の子どもの体験について

- ・ シンガポールの子どものとの交流事業で親や子供が感動する姿を見て、子どもにとっていろんな体験が必要であると感じている。
- ・ 私たちが子どもの頃は、地域で活動するのが当たり前ようになっていたが、今は、お餅つきをしようと提案するとノロウイルスやインフルエンザが怖いと反対される。キャンプファイヤーも火を使うのと反対される。
- ・ 子どもの活動に学校も理解があり、先生の参加や呼びかけがあったが、今は何もない。子どもが参加しにくい原因になっているようだ。
- ・ 私たちもリーダーとして活動していたが、私たちの活動を見守ってくれていた指導者や役員がおり、安心して活動できたが、今はそのような環境がなくなり、子どもがかわいそうだ。
- ・ 子どもの数も減ってきたけれど、習い事などが忙しく、地域の活動に参加できないし、親も役員になるのがいやなどで、参加させない。
- ・ 親が体験していないので、子どもの体験が理解できないのだろう。
- ・ 親の存在が大きく、親がいないときは生き生きとして過ごしているのに、親の顔が見えるとしゅんとする子どもが少なくない。
- ・ 子どもの体験機会に興味を示す親は多い。
- ・ 親子でプログラムを行うとできない親が多い。
- ・ 生きがいや自分の存在を認識させる必要がある。
- ・ なんでもよいから体験すればよい。コミュニケーションを豊にとって。



⑤青少年団体に期待すること

- ・ キャンプは面白かった。子どもだけでテントを建てて泊まり、食事を作るなど、このような体験ができる活動を進めてほしい。また、指導者が近くにいると安心してチャレンジできた。そのような指導者が増えれば活動も活発になる。
- ・ 今は、地域の活動も習い事も親がついていくようだ。任せることができる活動があればよいのだが。
- ・ 地域でも青年の活動は必要だ。彼らの活動のバックアップが大切。そうしなければ、後継者は育たない。
- ・ 町を巻き込んだ事業に親も子どもも関心を示している。
- ・ 子どもに体験の機会を数多くつくり、経験者が温かく見守る。
- ・ 小さな単位で体験の場を作る。経験者に呼びかけ、指導することができるのではないかと。
- ・ 子どもたちができそうなことは任せてみる。

青年期のリーダー体験から その1

出席者構成： 30代5名(男4女1)、40代3名(男2女1)、50代5名(男4女1)

*対象者全員が過去にはメンバーまたはリーダー経験者

①青少年活動にメンバーやリーダーとして関わった諸経験について、振り返ってみるとそれらをどの様に現在受けとめておられますか。

- ・現在、全ての場面で効果がある当時のボランティア実践であったと思われる。
- ・コミュニケーションのあり方を学んだ。そのことが社会・会社において大変役に立っている。そして、誰よりも更にそのあり方を問う様になっている。これらはすべてボランティア活動で得た財産だと思っている。
- ・ボランティアの基本的姿勢を体験したことは、一般社会においても色々な場面ですぐに役立ったと実感している。
- ・多様な体験の重要性をメンバーと共に学ぶことができた。そこには、互いに成長し、成長し続けることの大きな喜びがあった。すなわち、チームワークにおける各々の役割を果たすこと、責任をもって行動する経験は貴重であった。
- ・一人ひとりに寄り添い、語り合うことの大切さ学び、一人ひとりとどれだけ深く関わることができるかを問い続けることができた。それは、まさしくディレクターとリーダーとの深い関係性の中で学んだことである。

②その後の自分の生き方や人との繋がり、考え等で影響を受け、生活や仕事の上、役に立っていることはありますか

- ・仲間を求め、ボランティア同志の触れ合いの中で、活動の中で絶えず自然と一致感、連帯感が生まれていた。それは、異次元の世界が面白いという感覚と創造していくことの喜びを得る結果となった。
- ・絶えずメンバーと向き合い、目配り、気配りしながら「傾聴の大切さ」、「受容の大切さ」を学び得る結果となった。それはまさしく、人格と人格とのぶつかりであり、公平な立場で各々の価値観を知り合うことの魅力と大切さを学んだ。

その基本は、先達の方、先輩、ディレクターとの関係性の中で多々教えられてきたことであると感じる。憧れの方々が存在していたと感じている。

以上は、家庭、職場等において多くは生かして行けているが、難しい部分もあることもしばしば感じている。いずれにせよ他者に対してより良い関係を示し得る指導者でありたい。

③現在、PTAや地域・社会活動などに参画する上で、考えておかねばならないことを過去に学び得た。

- ・対象者の発達課題、ニーズに即した活動を心掛けた。しかし、社会背景が変遷する中でその対応アプローチの仕方が多様・複雑化していくことを身にした。すなわち、徐々にマーケティングマネジメント等専門性が問われていくことも実感した。
- ・何かと管理される社会、子ども社会、学校等において子どもの主体性、自主性が阻まれている現状を見ると、青少年活動のあり方を再度問わなければならない時が来ているように思う。特に、社会人、親になって今までの経験を活かしつつ、「地域」を意識するようになった

- ・人材の育成は、青少年活動においては何よりもまして重要な課題である。それは団体がミッションの実現をなしていくためには、絶えず信念、機会、能力を総合的に備えておかねばならないということである。
- ・青少年活動に対する親の期待は何なのかを追及し、それに如何に応えていくのかが今まさに問われているのではないか。
- ・阪神淡路大震災救援・復興活動を通して気づいたことは、まさしく日常性であった。それは、団体活動の体験が震災ボランティア活動に活かされたのは大変大きかったということと日常の地域に根差した活動が如何に大事であるかを痛感したことであった。また、各団体が民間団体としての立場で大変大きな働きをすることができた意味も大きいと感じた。

④青少年・社会活動を展開していく上で、現在、学校と家庭との連携は大変難しくかえって何か阻むものがあるように思われる。

- ・青少年団体に対する学校の理解と協力を期待するものの、絶えず責任の所在を問う現場の姿勢が強く、大変難しい状況である。
- ・多種多様な体験をさせたい気持ちはあるが、保護者がそこに関わることには責任問題もあり、かなり躊躇するのが実態である。
- ・自らが体験した青少年活動の良さ、メリットを具体的にどの様に伝えられるのかを考えると難しいと感じる。
- ・メンバー、リーダー体験は、ある程度継続してみて初めてその良さに気付く。

⑤今後への課題と提言

- ・現活動が社会のニーズに応え、絶えず多くの人を受け入れられることができる土壌を更に築いてほしい。そのためには、もっともっと次世代を如何に育むかを真剣に考え、取り組んでももらいたい。
- ・活動そのものに没頭して奉仕する経験は確かに大きな意義があることはあらゆるところで確認できるが、各団体の理念ミッションを背負って活動しておればその意義はもっと大きな収穫になり得たのではないか。
- ・今回のヒアリングを通して、自分の能力を活かして社会や人間に確かに貢献しているという実感を持ち得たと感じた。



青年期のリーダー体験から その2

出席者構成： 20代1名（男0女1）、30代（男4女2）、40代2名（男1女1）

50代1名（男1女0）、70代（男1女0）

＊対象者全員が過去にはメンバーまたはリーダー経験者

①活動に参加したきっかけ、動機について

- ・外国へ行かなくても外国の人と出会う機会がある。
- ・昔は簡単に外国へは行けなかった。
- ・親は全くこういう世界は無知。
- ・（子どもの頃）家だけでは一人なので（活動に）行って楽しかった。
- ・先輩後輩（の関係）がある程度自分の基礎をつくった
- ・小学校の時はゲームをずっとしていた。小学から中学まではゲームや漫画が好きだった。大学に入り、キャンプに関わり、刺激が人よりは大きかったのかもしれない。自分が変わったというのはそういう影響があったのかもしれない。
- ・父親はよくキャンプに連れて行ってくれたが、自分自身は大嫌いだった。
- ・幼児期に草木を見ながら1時間程歩いて通園通学することや地域の子ども会に入ることが常であることなど、育つ環境により活動に対する捉え方や思い出も違う。



②体験したことで、どのような記憶印象があり、自身にどのような影響があったか

- ・定年を迎えてから、会社とは違う出会いがあり、交流の場となった。
- ・社会人になってから関わり始めて、団体に育てていただいたと思っている。人前で話すこともできなかった。しゃべらなアカンことが増えて、しゃべれるようになり、グループワークやプレゼンや会の企画を教えてもらった。多分、仕事だけではそういうことは出来なかった。
- ・（活動）の仲間が助けてくれて地域で祭りを開催することができた。
- ・異年齢の人との交わりが楽しかった。
- ・上下もなく1対1で話せることが良かった。
- ・活動をしていた名残りかもしれないけど、土日がメインだったというか、今でも土日仕事していても苦痛ではない。でもそういうことをしていなかったら、苦痛でしかないのかもしれない。いい意味でも悪い意味でも。

③青少年活動と地域活動との関連性について

- ・子ども会や子ども劇場の役員をやった。
- ・子どもはボーイスカウトに、妻はデンマザーに、様々な機会に参加していた。
- ・PTA、子ども会の役員を妻がやり、それを手伝った。
- ・持ち回りで役が回ってきたから自治会の役が回ってきたが、活動に忙しくてPTAとかは何もしていない。

④現代の子ども・若者について

- ・今の若い子は妙にしっかりしている、現実的。
- ・両極端。はまったら、はまるし、研修に行き過ぎちゃうと思う子もいるし、はまるまで時間がかかり、助走に時間がかかりその間に他に興味がわいたり。ただ、今の学生は自分達の頃に比べると忙しいと思う。そのなかで優先順位をつけるのが苦手な子が多い、どこを一番にしたらいいかを考えても（人に）聞けない。
- ・子どもに対してのことと考えると、今の子どもには自己肯定感を育ててほしい。そこが育っていない学生も多いと思うから、学生にとって活動する場所は居場所になればと思う。ただ、学生にとってそこだけになってはと（問題もあると）思う。
- ・すぐに、業務命令ですか？休みは貰えるのですか？と主張する。
- ・多様化しているというか、生まれた時から過酷、この環境でどう育つかと思うこともある。私は健康な子ではない子と会うことが多い。問題があって会う子が多い。死にたいという子も多い。20歳前後くらい、死にたいという。なんで？と聞くと切羽詰まり感が軽い。
- ・恥ずかしいの意味が違う。羞恥心というか、人と違うと観られることが＝恥ずかしいと考え、みんなと一緒にいいと思う子が居るように思う。
- ・相談することが苦手なのだと感じるのと、青少年活動をすることで、変に自信をつけてしまっている部分もある。現実的。
- ・精神論のような同じ釜の飯を食うというのが、なんで？と感じたりする。精神論を理屈にするのは…。
- ・自分がしてもらったことを（若者）にしてあげたい。一緒に連れて行ってあげたいと思っても、今の若い子にしてあげたいと思っても、お金払って勉強しに行くとか、土日使ってまでというような感じで反応はよくない。自分が上の人に連れて行ってもらって世界観変わったとかがあがあるけど、同じようにしてあげていけど、難しい。

⑤青少年活動・団体への期待や要望など

- ・時間的に自分がいろいろ時間を費やしたいことがあるから（活動が）遠くなってしまった。自分の中で比較する。どっちをとる？と思うと、今自分が持っているもののほうが上がるからごめんと思う。環境が変わった時にタイミングが合えば誘われたらやるかもしれない。
- ・休みの時に行って、仕事の合間に満足に準備が出来ない、そういう意味では何か活動に行ったらトラブルがあったら、仕事に影響してしまいそうで。そういう意味で責任の所在が怖い、明確にあれば自分達の世代も安心していける。学生と同じように求められる場合があり、体力が…。学生は徹夜で話でも元気だが、僕らは1週間くらい戻らない。違う立ち位置で考えていかなければならないと思う。
- ・土日の休みの時間を削ってやれるだけの熱量があるかどうかが続けられるかどうかというポイント。行きたいと思っても年齢的体力的につらい。一泊二日でも、自分のことじゃないから気を張っている。
- ・圧倒的に普通の生活のなかで体験をするという機会が少ないならば、選択肢が多くあってもいいと思う。子育て支援の親と関わるなかで、まずはそこに出ていける人、出ていきたくても出ていけない子どもがいるなかで、出て行こうと思ったときにちょっと出てみようと思えることを（機会）を何かしらこういう青少年団体が作っていかなくてはいけないのではないかと思います。関わる人は、心やお金とか豊かじゃないとやはりそれは長続きしない。今うちは社会人が多い（新卒から30歳位）。年によって環境によって違うから、今は休んだらいいといい、そこで切るではなくて、新たな居場所を団体が作っていてもいい。
- ・今、責任の所在がどんな活動をするにも難しい。ひと昔前は活動するところのボスみたいな人が責任を取るといわれていた。職員が責任を取るけど、学生は好きなことやりなさい、それがあなたたちの学びだからと言われていた。けれど、今は（学生含め）個人の責任を追及されることが凄く多い。
 - ・今の若い人はやっているが、責任をもってはやらない。
- ・今の職場では失敗が許されない。やらせないから、だから若い子が育たないと思う。青少年団体も今そうになっているのではないかな。

今回のヒアリングを通じて感じたこと

①若い時に共通の思い出を持つ仲間は貴重な財産であること。

地域の子ども会、青年団、ボーイスカウト、YMCA、OAAいずれのグループであろうと若い時に共通の思い出を持つ仲間は「本当にいいな」と感じられた。若い時代の経験をそれぞれが話す中で、久しぶりにあっても、いまはバラバラに活動していてもたちまちその時代に戻っていける。楽しい経験もいいが、しんどかった、つらかった経験を共にしていることが大事だ。特にすべてが満ち足りた日常生活の中では、感動を共有することなどそうそうあるものではありません。私たちは苦しい共同体験の場を追い求め創り出していく努力をする必要があるのではないだろうか。いまはすべてが“あたりまえの”時代なので。

②憧れのリーダー、モデルとなる先輩がいること。

子ども会にしろ青年団にしろ、最初は一メンバーであった存在が、中学生や高校生になり、いつのまにかその活動のリーダーとして育っていつている。また大学生になって初めてキャンプリーダーとして活動に参加し、育っていく場合でもそこにはスーパーリーダー、身近なモデルとなるような存在がいたという。「学ぶ」は「まねぶ」から始まる。学習の成立には「模倣」が前提であり、模倣できるモデルが必要となるが、青少年活動には必ずそのモデルの存在がある。

③活動の中で「役割行動」を行うことによって、対人相互活動を学んでいること。

仲間集団になじめない人は幼少期に「お手伝い行動」をしてこなかった人が圧倒的に多いと言われている。子どもたちは家庭での「お手伝い行動」を通して対人相互活動を学ぶのであるが、現代の家庭に子どもが果たすべき「お手伝い行動」はそうは多くないので、子どもは家庭では「お客様」になってしまうことが多い。まわりが自分の欲求を満たしてくれるので、自らやろうとする姿勢、自発性が育たない。この世の中はギブアンドテイクでなり立っており、自分もまわりに何かを与えることが必要であることなどまるで考えられない子どもが多くなっているのではないか。青少年活動はリーダーを中心としたお互いの役割分担によって成り立っている。活動の中で「役割行動」を分担することによって、自然と対人相互活動を学んでいく。

また、引っ込み思案の性格がPD（プログラムリーダー）を経験することによって積極的な性格に、人前で話すことが苦にならなくなったという話も聞かれた。

④リーダーとして「考える」経験をしてきていること。

「考える」ということは

1. 先を読むこと—そのためには知恵をつかうことが必要です
2. 行動の目的を正しく理解し、それにかなった行動をすること
3. 自分のやっていることが相手にどう思われているかを理解すること
4. 状況を判断して気持ちを伝えること（感情の表出 もしなければなりません）

当然リーダーとしてはこうした要素を常に考えておかねばならない。子どもたちの、フォロアーの状況を的確に把握し、よく考えて行動する。そうした経験が「今何をしなければならないか」を常に考えるようになり、それがやがて自信となって、今を支えているように感じられた。

今回話を聞かせてもらった人々は、それぞれ地域や青少年活動に満足している人々が連絡を取り合って集まってもらったので、活動をしたことによる否定的な側面も聞いたがあまり出てこなかった。唯一感じられたのが、活動にはまりすぎると家族関係も含めて他の人間関係が限られてくるところであった。いずれにしろマズローの言う欲求の階層設に従えば、第三段階の「所属と愛情の欲求」、第四段階の「成就と承認の欲求」、そして最後の欲求である「自己実現」を満たした人々であったように感じられた。幸せな人たちである。(ちなみにマズローの欲求の階層説の第一段階は「生理的欲求」、第二段階は「安心、安定の欲求」である。)

最近の世の中には信じがたいような事件が起こる。犯人がどうしてそのような事件を起こしたのかその原因がわからないと人々は不安になるので、何とかもってもらしい理屈をつけて自分が置かれている状況とは違うことを確認して安心しようとする。私の恩師は、新聞社から犯人の心情等を聞かれると、「本人に聞いてみなさい。本人でなければ分からない」と答えられていた。いまでは本人でも分からないのではないかなと思ってしまう。自分の気持ちをきちんと話せるにはかなりの自己理解が進んでいなければならない。「ジョハリの窓」という研究があるが、それは私たちの心のなかには4つの領域があると捉えている。自分も他人も分かっている「開放領域」、自分は分かっているが他人は知らない「隠ぺい領域」、他人が知っていて自分が気づいていない「盲点領域」、自分も他人も分からない「未知の領域」である。自己理解が進むには、「未知の領域」を減らし、「開放領域」を広くしなければならないが、そのためには他人に自分ことを知ってもらう自己開示をする必要がある。自己開示にはTPOがあり、自己開示をしたためにその人間関係に危機がおとずれ、傷つくことさえある。しかしその危機を乗り越えたときに本当の人間関係が生まれる。人と人との関係は本当に面倒くさいものであり、バーチャルな世界に逃げ込もうとする気持ちも分からないではないが、それでは自分というものがなかなか理解できない。

青少年活動は学校や学年を超えた新しい人間関係を、友人関係を産む可能性が高い。その人間関係の中で、好奇心が触発される居場所である。こうした体験は若者の意欲や自信を引き出すに違いない。

「どんな状況でも活躍できる居場所を自分で見つけ、他人の居場所も作れる力を身につけてほしい」

(今村亮 2016.2.4 朝日新聞より)

～提言～

これからの青少年活動に向けて

今回のヒアリング調査を終え、あらためて確認されたこと、それは青少年活動（青少年団体活動）の本来の意味について。即ち、青少年期における実際の体験当時とともに、その後のくらしや仕事、さらに人生においても、これらの経験は有意義な意味や価値をもたらしていること。無論、そうした実感や思いを少なからず持てた人たちだからこそ、今回こうして集まり、語ってくれたのかもしれない。

しかし活動を推進する側の私たちは、こうしたことを十分に理解し心得た上で、確信と理念をもって活動を展開していかなければならない。活動そのものが自動的にその成果をもたらすのではなく、常に評価、検証、学習、鍛練を積み重ねていくことによって、求める成果が得られると考えるべきだろう。そこで、これからの青少年活動の展開、団体としての取り組み課題について、以下の留意点をあげてみた。

①青少年(団体)活動は継続した関わりや活動によって、その成果がもたらされる

今日、多くの機関やNPOなどがキャンプや休日のイベント等を日常的に展開している。色々と工夫された、また趣向を凝らした様々なプログラムが行われている。実際に指導するリーダーたちも専門的な講習を受け、様々なライセンスを所持していることも稀ではない。しかし問題は、これらの活動が一体何のために、何に向けて取り組まれているのか、ということではないか。どんな経験や結果も一つの成果として、例えば人との出会い、関わり、楽しみ、寛ぎ、競い合い、葛藤や喜怒哀楽の入り交ざった感情、そしてグループ活動やチームワークの実際を伴う体験の連続がもたらすもの。即ち、活動のスキル(技術)とともに、グループ(小さな社会)活動の知恵や実際、その中で自身の立場、役割が徐々に変化していくことを通して経験を重ね、新たな役割を担っていく。初期の頃の自らの不安な経験は、いずれの時期に立場の弱い者への接し方の根拠やヒントにもなる。耐え、乗り越えた経験が生かされた時、人は体験の意味を理解し、自らの成長を実感する。守られ、保護される立場から人を受け入れ、寄り添う立場へと進化する。経験のねらいがここにある。

青少年活動は持続性や継続性を基本とすることによって、真にその成果を発揮する活動であり、そのねらいは豊かな人格形成の支援である。そこで学び、身に着ける能力やスキルは他者と比較、競争するためのものではなく、自分自身がまた人とより良く生きるためのものである。団体の持つリーダーシップや活動はそれを育てるものであり、永年に渡って積み重ねられてきたものである。数年間の学生時代の経験も、グループ内の地位や立場、さらには子どもたちとの活動場面においても、様々な役割行動が求められる。やめないで続けること、時には厳しい評価を受けること、辛い一面もあるが、一時的な参加者の立場ではなかなか得られないものがそこにはある。活動の意味や団体のミッションを自分なりに理解できた時、さらに思いや世界は広がっていく。

認められ、褒められ、必要とされ、役に立つ実際体験の機会を経て、次には自らがその実感を他者に与え、環境を作る側になることが成長の実感ともいえるものだろう。

②青少年活動を推進する指導者のパスポートは団体、組織が本来もつ「理念」

活動やそれを推進するリーダーシップは、そのいずれもが組織や団体が目指す成果を得、本来の目的を達成するための効果的かつ必要な手段、方法である。参加者にとってはそれは楽しい一時であり、仲間が出来たり増えたりする事であり、時に出番や役割をこなす等、実際経験そのものなのだが、団体にとってそれは計画的に準備された効果的な手立てとして、その目的や過程を理解した指導者やそのチームワークによって実践展開される具体的な手段である。「理念」とは団体や組織が存在し活動する目的や社会的意味、そのあり方を示し「心の方向性」を意味する。第一線の現場を担う指導者やその彼らを指導する先輩指導者、さらに立場的に上となる団体指導者がこの理念やミッションをより理解できていなければ、活動は成果を確認することも得ることも出来ないだろう。携わる活動の意味や目的を考え、自らのあり方や生き方との関連でそれが少しでも理解、確認された時、指導者個人の成長もまた確かなものとなることはすでにふれたところである。

団体の持つリーダーシップは先輩、先人たちが長年、積み重ねてきた成果や反省の中で培われてきたものである。その根源のテーマは、団体が発足したこの活動をスタートさせる必要のあった当時の社会問題や課題、また期待が背景にある。時代と共にその状況は変わりつつもあるが、捉える視点や対象は大きくは変わっていない。団体や組織の若手指導者もこうした使命や目的を日常的に意識する指導者によって育てられてきた。

プログラムやリーダーシップがともすれば、一過性の楽しみやイベントに終始しかねない状況は避けなければならない。それでは真の指導者は育たない。指導者としての経験が、いずれの人生で役立つのは、よろこびや苦労を分かち合える仲間とともに、理念をもった良い指導者のもとで取り組まれた活動だからである。

③社会現場が求める青年の資質、その多くは青少年活動によって体験的に育まれる

2014 年度の調査研究活動報告でも紹介した「社会人基礎力」。「職場や地域社会で様々な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として経済産業省が有識者の提言を受け示したものだが、今回のヒアリングにおいても、発言者の多くは自身の経験の振り返りの中で、それぞれに関連する内容を込めていた。因みに「社会人基礎力」とは次の三つの能力を示す。

- (1)前に踏み出す力（アクション） 一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力
- (2)考え抜く力（シンキング） 疑問を持ち、考え抜く力
- (3)チームで働く力（チームワーク） 多様な人々とともに、目標に向けて協力する力

これらは、今日の青少年には不足しがちな要素としても紹介され、昨年の調査報告においても、県下事業所の担当者の多くが、新規採用や雇用について、重視したい要素として挙げていた。その中でも「物事に自ら進んで取り組む」「秩序やルール、人との約束を守る」さらには「色々な人と協調し、和やかに過ごせる」などへの期待は高く、さらに「自分の意見をきちんと発言」「目的を設定し確実に行動」がそれに続いていた。

今日の社会で育つ青少年、特に青年に関しては、次のような傾向がよく聞かれる。

- ・役割を自ら引き受けることはあまりなく、指示待ちで、責任行動は尻込みする傾向
- ・社会関係を自ら作ることは概して苦手（自分をさらけ出すことをあまりしない）
- ・社交的に見えても、次に中々進まない（自己防衛が強く、いわゆるソフトエゴイスト）
- ・サービスを受ける側の体験は豊富だが、提供する側(作り出す側)の経験が少ない
（人を支えたり助けたりの経験がなく、助けてもらったという実感も少ない）
- ・やりたいこと重視のくらしを享受しているが、自らが何か出来るという実感は乏しい
- ・チームワーク活動や体験活動をして、結果にこだわりその意味を考える事が少ない
- ・会話、対話をあまりしないので感受性、情緒性は低く、言語表現力が弱く稚拙 等

青少年活動は、ほぼ初対面の人たちとの出会いから始まり、グループ過程を伴った活動の推移、さらには目的を確認し計画を立て、役割分担を経て他者を巻き込んだ活動の実践展開を伴っている。そしてその過程で他人(時には弱者)や社会に対する関心、理解を深めていくなど、多くの相互啓発の機会に恵まれており、それらを通して深い自己理解もまた可能となる。行動力や社会力、また協調性といったものはこうした経験から養われていくものと考えられるが、これらは常に可能性としてあり、実現性や成果はやはり活動の場における身近な団体指導者のリーダーシップに依る。

継続した活動場面では、逃れられない困難や緊張の場面も少なくない。そうした抜き差しならない場面で色々なドラマが起きている。後世になって、その多くはエピソードとして語られることが多いが、これを語り合うのは苦楽を共にした限られた仲間の特権であり、証ともなるだろう。実際経験に基づいた知恵や能力またセンスというものは、本当の仲間と共に、本気の取り組みがなければ、得られない。青少年活動、その体験、経験から真に得たものは今、そしてこれからの時代を生きる力や知恵となることだろう。

④今、地域が青少年活動を求めている、指導者OBはその貴重な理解者、協力者となってほしい

今回、青少年期に青少年活動、育成活動に携わった方たち、約 60 名からお話を伺うことが出来た。現在は、皆さんそれぞれの社会現場で、また家庭や地域で活躍されている方たちばかりだった。70 歳で育成活動や地域のお世話役の現役を務めている方もあった。皆さん共通して語っていたのは人、町を生かし育てるのはやはり「人の絆」だった。

青少年育成や地域づくり、また仕事の面や保護者、大人として等それぞれの分野と立場で、経験を生かしながらの現状や思いも十分に伺えた。我が子にもこうした体験や活動の機会を与えたいとのお話も聞かれた。

今日、その重要性や必要性を増す青少年活動の今後を考える上で今、経験者 OB の協力や支援はかなり貴重であり、積極的かつ自発的な関与もまた期待するところである。OB 会やその協力の仕組みを持つ団体もあり、経験者が協力できる内容とともに、それが可能な方法や条件等が検討される必要があるだろう。

都市化が進み、ポスト産業社会も成熟化したといわれる近年においても、青年たちの活動は地域性を備えていた。彼らの活動が遊び、楽しみ、つながり、そして町づくりの担い手仲間へつながっていく都市部の青年活動の話も聞かれた。但馬では農村芝居が青年団活動として伝承、永らく引き継がれ、U ターン組の若者たちがその後の担い手ともなった。その世代が今、地域の担い手として第一線で活躍している。以前の絆は今も生きていた。

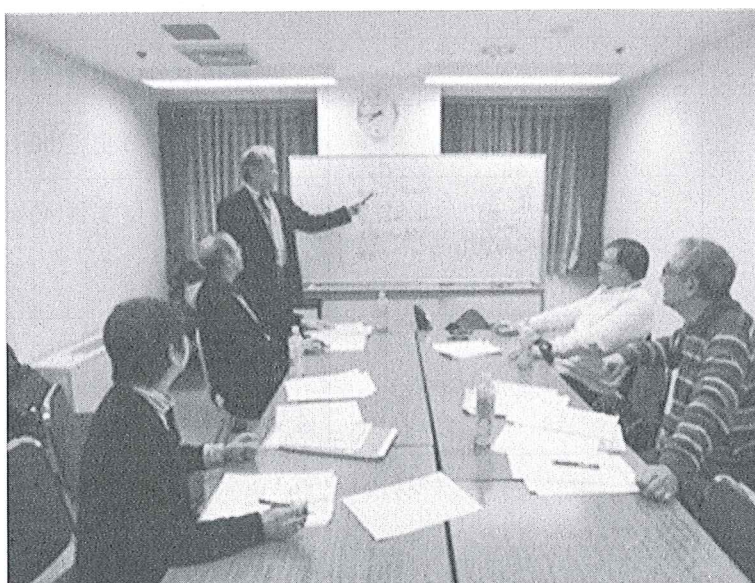
青少年の育成に関心をもつということは、彼らが育つ環境としての地域や社会に対して問題意識を持つという事に他ならない。問題や課題を見つけた時、一体誰がそれを問題提起し、行動を起こすのだろう。本来、青少年活動とはそれなりに社会運動性を伴ったものだった。青少年団体の多くは社会課題としての青少年問題やその環境に目を向けてきた。今日の現状は、彼らが育つ環境には適していない傾向をかなり持つことは事実だろう。

青少年活動が今、もっとも連携すべきは地域そして学校ではないか。特に地域は子どもたちにとって、もっとのびのびと活動そして過ごせる場所にならねばならないし、青少年活動の目指すところの一つもまた、こうした身近な暮らしの環境のありかたに向けてのものだった。豊かで安心な遊びの環境、身近に仲間のいる暮らし、こうした子どもたちの育つ環境が今、弱体化しつつある。従来の団体活動や指導者の現状ではなかなか対応できない状況下、新たに地域や学校との連携も求められている。これまでの地域活動、組織活動としての青少年(団体)活動の経験を生かしながら、これからの「地域や社会の絆づくり」という新たなテーマに多くの人たちの理解や協力を得て積極的に、かつ中核的に関わっていかねばならない。今回、地域でまた社会現場で、その有力な支援者、協力者となる人たちに出会えたといえるだろう。

2015年度 兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究委員会委員

(順不同 敬称略)

田 淵 創	常磐会短期大学学長
山 口 徹	神戸 YMCA 名誉主事 兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問
速 水 順一郎	兵庫県青少年団体連絡協議会 会長
清 水 勲 夫	(一財)OAA(野外活動協会) 専務理事 兵庫県青少年団体連絡協議会 副会長
原 田 礼	兵庫県キャンプ協会 理事 元青少年活動コーディネーター
田 中 雅 子	(一財) OAA(野外活動協会) 総務主任



調査ヒアリング開催日程

No.	実施日程	会場	出席者
①	2015.11.21(土)	淡路市一宮町公民館	①女性(40代) ②女性(40代) ③男性(60代) ④女性(40代) ⑤女性(40代) ⑥男性(60代)
②	2015.11.28(土)	県民会館 7 階会議室	①男性(60代) ②女性(30代) ③男性(50代) ④男性(60代) ⑤女性(30代)
③	2015.12.11(金)	尼崎市青少年センター	①女性(60代) ②男性(60代) ③女性(60代) ④男性(70代) ⑤女性(50代)
④	2015.12.12(土)①	県民会館 7 階交流プラザ	①女性(60代) ②男性(40代) ③男性(60代) ④男性(70代) ⑤男性(50代)
⑤	2015.12.12(土)②	県民会館 7 階交流プラザ	①女性(40代) ②男性(20代) ③女性(30代) ④女性(30代) ⑤男性(30代)
⑥	2015.12.19(土)	香美町村岡中央公民館	①男性(50代) ②男性(50代) ③男性(40代) ④女性(30代) ⑤女性(30代) ⑥男性(40代)
⑦	2015.12.22(火)	県民会館 7 階交流プラザ	①男性(60代) ②女性(60代) ③女性(60代) ④男性(30代) ⑤男性(60代)
⑧	2016. 1.10(日)	姫路市民会館	①女性(30代) ②男性(30代) ③男性(30代) ④男性(30代)
⑨	2016.1.12(火)	県民会館 7 階交流プラザ	①男性(70代) ②男性(60代) ③男性(60代) ④男性(60代) ⑤男性(60代)
⑩	2016.1.16(土)	神戸 YMCA カレッジ	①女性(40代) ②男性(40代) ③男性(40代) ④女性(50代)
⑪	2016.2.25(月)	西宮市民交流センター	①男性(50代) ②男性(50代) ③男性(50代) ④男性(50代) ⑤男性(30代)

【協力いただいた団体】 順不同

- ・兵庫県子ども会連合会 ・日本ボーイスカウト兵庫連盟 ・兵庫県連合青年団 ・神戸 YMCA
- ・野外活動協会(OAA) ・兵庫県青年洋上大学同窓会 ・兵庫県世界青年友の会
- ・神戸市青年団体協議会 (活動事業の団体名で表記)

※資料【2012 年度調査研究ダイジェスト版】

すこやかな成長に大切なこと

『子どもの頃の体験が大人になってどのような影響を及ぼすか』に関する調査報告 (要約)

兵庫県青少年団体連絡協議会 平成 24 年度調査研究

□今回の調査のねらいと方法

子どもの頃の体験や活動が将来、どんなことに役立っているかを具体的に明らかにし、それらが今後青少年に関わる指導者や育成者の活動やその企画の際に効果的に生かされることをねらいとしている。

独立行政法人国立青少年教育振興機構による実態調査(平成 18～22)と調査研究(同 24 報告)では、体験活動が多い程「自尊心感情」「共生感」「規範意識」が高いことや、成人後に社会的地位「最終学歴」「年収」等が高いことも示された。しかしその一方、この 5 年間で自然体験活動の体験率が減少している状況も明らかになった。

この調査の内容は、基本調査 9 問、現状調査 21 問、活動・体験効用調査 42 問で構成され「子どもの頃の体験(A)」が「大人になってどんな場面に、あるいは思いに至る事(B)」に役立った、生かされていると実感できるか、その「生かされ実感や関連性」を 4 段階で尋ねている。A が B という効果を生むかどうかの仮説に対し、本人の反応・検証を求めている。そして何よりも効果あり、となればその効用を意識した取組み姿勢こそが、我々に期待されていることになるのではないかと考えた。

○調査対象者：兵庫県内在住の 20 代から 60 代の成人 260 名 (有効回答数 225、回収率 86.5%)

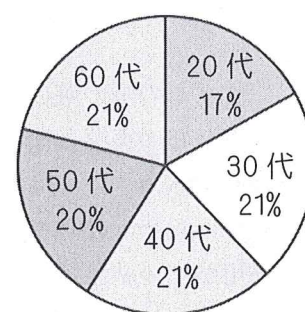
男女、年代、地域割合が平成 23 年の構成割合の実数を代表するように選んだ。

○調査方法：平成 24 年 10 月～11 月 2 ケ月の期間、対面直接、または郵送による返信解答。

□この調査に参加した方たちはこんな意識、行動を・・・

『自分をより高めたいという欲求は』86%が「ある」、60代はさらに高い
『努力を惜しまず、学ぶ姿勢をもっている』は年代が上がるほど高くなる
『将来に夢や希望を抱いている』『家族を大切にしている』は 50代が高い
『困っている人に声を掛ける』は 84%で、年齢に比例していっそう高くなる
95%が『義務や責任を進んで果たします』を選び、兄弟姉妹数が多いほど高い
『わがまま自己中心的といわれる』は 20代、60代が他世代よりは高い

(回答者の状況)



□学校での学習、教育体験から

教育活動体験の効用は家庭や遊び体験と比較し、やや低い傾向を示している。しかし、その効用は年代が上がるほど概ね肯定的に評価されている。学校での厳しくも多様な体験は、若い頃には気付かなくとも人生経験を重ねるうちに、受け止め方が変わっていく。

(効用が高い結果が示された体験例 *設問回答は 4 段階で平均値は 2.5 だが、3.0 以上を積極的肯定と判断)

- ・叱られることも多い「道草」 ⇒ 様々なものとの遭遇や発見があつて有益だった
- ・友達とのケンカや遊び ⇒ 協調性を学べたり、思いやりの心が身についた

- ・教師に褒められた ⇒ 自分の長所を知り自尊心が満たされた。褒められ(叱られ)体験は教師との豊かな人間関係を示す出来事と認識。褒められ体験の効果がより大きい
- ・当番や係など役割、責任の体験 ⇒ 責任感が身についた等と概ね肯定的。一人っ子には家庭生活では「お手伝い」未体験者もいることから、学校での体験は貴重なものに
- ・学校で与えられる宿題や課題 ⇒ その効用には30代にはやや低い評価が、ゆとり教育の影響か
- ・クラブ活動への参加 ⇒ チームワーク、責任感、達成感を味わえる体験だった
- ・運動会等、学校行事への参加 ⇒ 非日常活動に対する関心や期待感がもてた

□家庭生活で育まれたもの

それは大人になっての思いに大きく影響し、役立っている実感が強い。家庭の生活習慣は「こころと絆の基盤」を育み、支え合いは「やさしい心」を育てている。またケンカや叱られ体験は、自らを見つめ直す成長のきっかけと認識され、清掃や行事など地域を体感する機会は地域への関心、愛着を育てている。子どもの成長期と重なる家庭生活はかけがえなく大切なものと捉え、また家庭のルールや約束体験は後の社会生活への移行がスムーズになる効果があると認識している。

〈効用が高い結果が示された体験例〉

- ・起床・食事・就寝などで規則正しい生活をおくった ⇒ 生活や健康に関する自律心が習得出来た ⇒ 現在、出来るだけ規則正しい生活をしている（これらには高い相関）
- ・家族で守るべきルールや習慣があった ⇒ 社会のルールの理解や適応につながった
- ・家族の誕生日を祝った ⇒ 家族を大切にする思いの高まり ⇒ 現在、出来るだけ家族揃っての食事を心掛けている（これらにも高い相関）
- ・親にほめられたり叱られたこと ⇒ 自尊心を満たしたり、善悪の気付きを実感
- ・ナイフや包丁を使うこと ⇒ 道具の安全な使い方が身についた
- ・家族の看病、祖父母との同居体験 ⇒ 大切な家族の実感、高齢者へのいたわりや敬いの思い

〈その他〉

- ・食事、団らん、絆等、家庭生活の効用実感は女性の方が全項目で高く唯一、男性が高いのは「近所の人に叱られた」こと(女性の未体験率は男性の倍となっている)

□「遊び」から学んだこと

子どもの頃の遊び体験、その効用は全項目で高い数値となり「成長の糧」との認識は、大多数の大人たちの実感となっている。遊びを通じて人との関わりや協調性、リーダーシップが育まれ、冒険心や体力さらには集中力の高まり等からケガへの注意力や抑止力の向上、工夫や創造力の蓄積をしていたわりの心を育てること等につながっている。

〈効用が高い結果が示された体験例〉

- ・近所の仲良しとよく遊んだ ⇒ 協調性やリーダーシップを養う経験となった
- ・野外での遊び(虫採りや川、山での遊び) ⇒ 冒険心や体力が身についた
- ・遊びでケガをしたこと ⇒ ケガに対する注意力が身についた
- ・手作りのおもちゃで遊んだ ⇒ 何かを作り出したり工夫する力が身についた
- ・異年齢の子と遊んだ ⇒ ありがたみや我慢、手加減が自覚出来るようになった

〈その他〉

野外での遊びが冒険心や体力の向上に役立った、とするのは60代が最も高く、おもちゃを手作りして遊んだ人は、他世代との遊びにもよく関わっていたことも示された。また、子どもの頃の体験の豊かさは、大人になっての収入の多さに影響することは他の調査でも示されたが、仕事の意味や価値に

ついでに、コミュニケーション能力や判断力、決断力等は集団で遊ぶ場面では常に刺激され、磨かれる可能性の高い能力ともいえるだろう。

□保護者、指導者、育成者のみなさんへ 「9つの提言」

1. 子どもが多彩な場面で多様な人々と出会える場を作ろう

いろいろな人たちとの出会い、関わりが心の基盤を作り、成長のきっかけを与えてくれる。

2. 教師や教育活動にあたる人は、もっと体験活動の大切さに気付こう

体験活動の意味や効用を理解し、生かされるよう情熱や期待をもって指導、育成活動を進めよう。

3. 家庭、地域に子どもの役割、出番を作ろう

役割や責任を果たす事は、人や周りに対し責任や誇りを実感し、喜ばれ求められる自分を経験する機会になる。

4. 地域の活動や行事に子どもを出来るだけ参加させよう

ご近所ぐるみの草引きや清掃、また行事やお祭り等は、地域を実感する貴重な機会。そこで様々な、地域で生きる人たちと出会える。地域の個性を知ることは住んでいる町への自信や誇りを持つことにもつながる。

5. 地域の少年団体活動に参加させよう

少子化時代、異年齢集団やグループ活動の体験は重要かつ貴重。そのチャンスを作るのは大人たち。

6. 子どもに積極的に野外遊びをさせよう

成長期に芽生える冒険心や創造性、それらを養う仲間との自然遊び外遊びを積極的に進めよう。

7. 子どもの様々な体験を日常化しよう

体験活動の日常化に向け、自然で自由な広場や環境、魅力あるプログラム開発、さらには指導者、育成者の養成が急務となる。

8. 豊かな遊びで安全能力を身につけさせよう

本気の遊びは注意力、集中力や気構えを高めてくれる、小さなケガが後の大けがを防ぐ知恵となる。

9. 子どもに困難な体験をさせよう

思考が育つには試行錯誤の体験が必要。困難に耐え乗り越える体験に大切なこと、それはやらなければならない活動ではなく、やりたい活動であることと、せっかちに手を出さない大人の見守り。

兵庫県青少年団体連絡協議会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通 4 丁目 16-3

兵庫県民会館 8 階

公益財団法人 兵庫県青少年本部 活動支援部 内

☎078(891)7410

